

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。

あるとき、おばあさんの親のうちに、おもちゃをするから来てくれといってきました。おばあさんは用があつて行けなかつたので、おじいさんがひとりで行きました。

おじいさんが行くと、つきたてのおもちをだんごにして出してくれました。おじいさんは、これまでだんごを見たことも食べたこともありませんでした。ひとつ食べてみると、とてもおいしかったので、もう食べられないというほどたくさん食べました。

おじいさんは、家でおばあさんにも作ってもらおうと思つて、

「これは、たいへんおいしうございました。なんていう名前のものですか」とききました。すると、家の人が、

「だんごです」と教えてくれました。

おじいさんは、おおよろこびして、わすれないように、口の中で、

「だんごだんごだんごだんご」といいながら、帰って行きました。

しばらく行くと、小川があつたので、おじいさんは、

「ぽいとこせ」といつて、飛びこえました。すると、「だんご」が「ぽいとこせ」になつてしまいました。おじいさんは、

「ぽいとこせぽいとこせぽいとこせぽいとこせ」といいながら帰って行きました。

家に帰りつくと、おじいさんは、さっそくおばあさんに、

「おまえの親のうちに、ぽいとこせっていうとってもおいしいものを食べて来たよ。おまえは作り方を知つてゐるだろう。早く作つておくれ」といいました。おばあさんは、びっくりして、

「ぽいとこせなんてものは、一度も食べたことがないよ」といいました。

おじいさんは、怒つて、

「おまえの親の家でこしらえるものが、おまえにわからないことがあるものか」といいました。

「わからんものはわからん」と、おばあさんがいうと、おじいさんは、そこにあつた火吹き竹で、おばあさんのおでこをたたきました。おばあさんは、おでこをなでて、

「まあ、だんごのようなこぶができた」といいました。おじいさんは、やつと思ひ出し

て、

「ああ、だんごだ、だんごだ」といいましたとき。

村上郁再話

資料『滋賀県長浜昔話集』三田村耕治（日本民俗誌大系4）